（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。

鄕黨　第十

1）孔子於鄕黨恂恂如也似不能言者其在宗廟朝廷便便言唯謹爾

kǒng zǐ yú xiāng dǎng xún xún rú yě sì bù néng yán zhě qí zài zōng miào cháo tíng biàn biàn yán wéi jǐn ěr

孔子、鄕黨に於るや恂恂如たり。言ふ能はざるぬ者に似たり。其れ宗廟、朝廷に在るは便便として言ひ唯だ謹しめり。

鄕は1万2千5百家、黨は5百家からなるとされる。孔子の鄕黨は曲阜（きょくふ）の闕黨（けっとう）、出仕されないときはここにおられ、寄り合いに出られたのであろうか、恂は説文に、「信（まこと）の心なり」とあり、おそれつつしむさまをいう(字統)。恂恂如は控え目であまり発言されなかった。どうもうまく言えないという風であった。出仕をされ、祭祀の行われる（禮法）宗廟や朝議のおこなわれる（政事）朝廷にありては、便は、通例、弁とされ、便便は弁舌にすぐれ、すらすらしゃべる、とされる。便は、人を鞭（むち）うって従順ならしめ、使役に便することが原義、便便は唯（い）々としてことに従うこと（字統）でもある。禮はかくあるべし、とピシリとおっしゃることもあれば、事が決すれば唯（い）々として従はれたのであろうか。直言されたとしても、唯、謹しんで申し上げられた。

読書会：この篇は孔子が実際に行動したことをまとめたもの。論語はこの篇で一旦終わったはず。以降の篇は弟子の言葉が多くなる、言葉も長くなる。第十までの篇は前編で、第十一からの篇は後編である。鄕黨篇はわれわれの行動の指針となる篇。音や動作など表す擬態語・擬声語が多くなる。似不能言者、まるで話せない人のようだという例えに違和感がある。恂恂如也をもう一回説明している。あとの便便言と対比する。公でははっきりと発言する。自分を育ってくれた人に対して、自分がいくら偉くなっても、偉くしない様子。中国では、郷党に帰るときは２パターンがある。ひとつは孔子のように慎む。ひとつは威張る。

2）朝與下大夫言侃侃如也與上大夫言誾誾如也君在踧踖如也與與如也。

cháo yǔ xià dài fū yán kǎn kǎn rú yě yǔ shàng dài fū yán yín yín rú yě jūn zài cù jí rú yě yǔ yǔ rú yě
朝して下大夫と言ふは侃侃如たり。上大夫と言ふは誾誾如たり。君、在せば踧踖如たり、與與如たり。

朝は朝議のこと、禮記の「王制」によれば、諸侯は公・侯・伯・子・男の爵位があり臣下は上大夫つまり卿・下大夫・上士・中士・下士の五段階がある。農夫も五段階があり、百畝で9人･8人･7人･6人養える田を持つのが上農夫5人養える田を持つのが下農夫である。百畝で9人を養う田を持つ上農夫に等しい禄をもらうのが下士。その倍が中士、その倍が上士、その倍が下大夫、その4倍が上大夫、卿となる。卿にも上中下があり、小国の上卿は大国の下卿、小国の下卿は大国の下大夫。下大夫は五人・上士は二十七人であった。「曲禮」には、「刑不上大夫（刑免除）」とあり上大夫と下大夫では大きな違いがあった。大司寇となった孔子が下大夫のままであったかは定かでない。侃（かん）は説文に、「剛直なり」とあるが、元来は祝禱して祈り、神気のあらわれる象、和楽の貌、侃侃は前者では、ビシビシと言うことであるが、後者なら、やわらぎ、たのしみて言ふこと。誾（ぎん）は、説文に、「和説（わえつ）して諍（あらそ）ふなり」とあり、おだやかに理をわけて争うこと、元来は門における祝禱をいう字で、「玉篇」の和敬なりの義が生まれ、人に接して和敬なるをいう（字統）となった。誾誾は、堂々と議論する（中日大辞典）ともされる。侃侃諤諤（かんかんがくがく）とは、侃侃が強く正しいこと、諤諤が正しいことを直言するとされる。君が在(いま)せば、踧（しゅく）はおどろくさまと足、踖（せき）は小さく重なると足からなり、踧踖は、足をすくめて恭敬の状、驚懼して進みえないさま、與與はのびやかなさま、威儀中に適（かな）えるの貌、遅からず速からず適当なはやさ等と釈される。與は、古語では諸侯が禮をもって親しく交わる事（中日大辞典）でもある。
孔子は昭公を追って斉に亡命したことがあり、定公の時に峡谷での外交交渉で功を成し、史記によれば、「定公十四年（BC496）、孔子、年五十六、大司寇に由りて相の事を行攝（宰相代行）し、喜色有り」とある。これは季桓子のもとであり、定公（諸侯）、季孫氏、孟孫氏、叔孫氏が上大夫（三人）であろうから、孔子がこの三人を押しのけて上大夫ということは難しく、孔子の禮の立場からも、下大夫に止まっていたとみるべきであろう。下大夫とは言うべきことは言う、上大夫とは申し上げねばならないことは申し上げる、君には君として奉る、しかし、いづれにおいても和楽の心を旨とされた。

3）君召使擯色勃如也足躩如也揖所與立左右手衣前後襜如也趨進翼如也賓退必復命曰賓不顧矣。

jūn zhào shǐ bìn sè bó rú yě jù jué rú yě yī suǒ yǔ lì zuǒ yòu shǒu yī qián hòu chān rú yě qū jìn yì rú yě bīn tuì bì fù mìng yuē bīn bú gù yǐ

君召して擯せしむるに、色、勃如たり、足、躩如たり。與に立つ所に揖して、手を左右にし、衣の前後、襜如たり。趨りて進むこと翼如たり。賓退すれば必ず復命して曰く、賓顧みずと。

擯（ひん）の声符、賓は、主に対して客をいう。擯は、説文に儐、「導くなり」とあり儀礼において主人を助けること、の別体として録しており、主客を補佐するものを擯介（ひんかい）といい、主に従うものを擯、客に従うものを介という（字統）。双方に数人がその係りに就く。君（主）が車から降りてくる賓を出迎え、賓の口上（来意）は上の介から下の介に、下の擯から上の擯を通じて主に伝えられる。君の補佐として孔子が召された。色は顔色のこと。勃（ぼつ）は内から外に力のあらわれること、勃如は緊張するさま。躩（かく）の声符瞿は隹（とり）が驚いて左右を視るさま、説文に、「隹、逸走せんと欲す」とあり（字統）、躩如は、慎しんでそろそろ歩くこと（角川漢和中辞典）。その場につくときの容貌であろう。揖（ゆう）は、説文に、「手、胸につくるを揖といふ（引手の禮）、手を前に組むのは譲（推手の禮）」とある（字統）。贈り物の授受に際して、両者が相列して揖する。皆、身を半轉し、手を戻して相揖する。左の人が揖すと手が移動して左向き、右の人が揖すと手が移動して右を向くとある。左（賓側）右（主側）ということか。襜（せん）は、ひざかけのことであるが、襜如とは、きちんと整えること。衣とは上着、裳が下袴。yī は着物のこと、yìは着せること。身体の向きが変わったので、衣の前後をきちんと整へることか。廟に、賓を導くのであるが、廟門から北向きに中庭の東側を主側が歩き、西側を賓側が歩き、それぞれ東の階段、西の階段から堂に上る。趨（はし）りて進むとは、主に先立って小走りするごとく位置に立ち並ばれたことであろうか、敬してつつしみて進まれた。翼(よく)如とは、敬してつつしむ意味がある、異が鬼形の神で畏忌すべきものであることからくる（字統）とされる。賓が廟から退出されると、車に乗られるのを待って必ず復命（結果を報告する）して、賓は車で顧りみることなく発たれた旨を申された。不顧とは賓が満足されたことをあらわすとされる。

4）入公門鞠躬如也如不容立不中門行不履閾過位色勃如也足躩如也其言似不足者攝齊升堂鞠躬如也屏氣似不息者出降一等逞顏色怡怡如也沒階趨進翼如也復其位踧踖如也

rù gōng mén jū gōng rú yě rú bù róng lì bù zhōng mén xíng bù lǚ yù guò wèi sè bó rú yě jù jué rú yě qí yán sì bù zú zhě shè zī shēng táng jū gōng rú yě bǐng qì sì bù xī zhě chū jiàng yì děng chěng yán sè yí yí rú yě mò jiē qū jìn yì rú yě fù qí wèi cù jí rú yě
公門に入るに鞠躬如たり、容れられざるが如し。立つに門に中せず、行くに閾を履まず、位を過ぐれば色、勃如たり。足、躩如たり。其の言、足らざる者に似、齊を攝げて堂に升るに鞠躬如たり。氣を屏めて、息せざる者に似、出でて一等を降れば、顏色を逞って怡怡如たり。階を沒せば、趨り進むに翼如たり。其の位に復すに踧踖如たり。

前段を更に詳しく述べたもの。公門は宗廟に入る門。鞠躬（きつきゅう）、 鞠は“まり“のことで、曲げること。鞠躬如は身をかがめおそれ謹むさま（中日大辞典）。不容は、鞠を容（い）れることができないというイメージ、高大な門の前で敬するさま。立つ位置は、門の真ん中を避ける。真ん中は君が進み、門を入ったところに君が立つ位置が設定されており、それが君位である。門を進むに、閾（しきい）を履（ふ）んではいけない。閾は境となる横木のこと。位（君位）を過ぐるにとは、君がそこに在（ま）さずとも在すがごとく、顔色が勃如となり、足は躩如となる。余計なことはおしゃべりにならず、言葉足らざるに似ている。齊（し）はzīで、衣服の”すそ“をいふ。攝（ひく、とる、かかげる）は、説文に、「引きて持するなり」と衣を攝（と）って守る意、衣のすそをとって、みだれを治めることが基本義（字統）。曲禮に、「將に堂に升（のぼ）らんとするに、兩手にて衣を摳げ、地を去ること尺ならしむ」、容を失はんがため、といふ。堂に升るさまは鞠躬たり。屏（ひそ、おさ）めるは、説文に、「蔽（おほ）ふなり」と訓じ、人の隠れるところ、屏風という。氣を屏（ひそ）めて息をせざる者に似ている、息を殺して升（のぼ）られた。一等とは最上段の階、逞は字義が多い。説文には、「通るなり」とあり、「楚において疾行を謂ひて逞となす」、逞志、逞意（自分のおもうままにすること）と用いられる（字統）。本字は盈（えい、みちあふれる）で盛んな意、たくましいこと、満足すること、憂いをとく、はなつ、くつろぐ（角川漢和中辞典）、などと訓じられる。怡（い）は和悦、よろこぶこと。出（い）でて一等を降（くだ）るに、顏色逞（はな）ちて、怡怡（いい）如たりと訓じられるが、（万事うまく運び）満足気でにこやかに下られた。沒はméiで否定形をつくる、mòで没す、沈む、消滅する、尽きること。階を沒（つく）せばと訓じられ、階段を降りきること、趨り進むこと翼如たり。其の（君）位に復（かへ）りて、踧踖如たり。踧踖（しゅくせき）は、足をすくめて恭敬の状、驚懼して進みえないさま、であった。君に忠の心を示された。
読書会：見せることにひとつの美意識がある、見られていることを意識してやっている。場面場面で意識的に顔色を変えている。

5）執圭鞠躬如也如不勝上如揖下如授勃如戰色足蹜蹜如有循享禮有容色私覿愉愉如也。

zhí guī jū gōng rú yě rú bù shēng shàng rú yī xià rú shòu bó rú zhàn sè jù sù sù rú yǒu xún xiǎng lǐ yǒu róng sè sī dí yú yú rú yě
圭を執りて、鞠躬如たり。勝へざるが如くし、上ぐるに揖するが如くし、下ぐるに授くるが如くす。勃如として戰色、足、蹜蹜如として循ふ有り。享禮、容色有り、私覿、愉愉如たり。

圭（けい）は、説文に、「瑞玉なり」とあり、公は桓圭（くわんけい）を執り九寸、侯は信圭を執り、伯は躬圭（きゅうけい）を執り七寸、子（し）は穀璧（こくへき）を執り、男（だん）は蒲璧（ほへき）を執りみな五寸、以て諸侯を封ず。[圭玉](http://www.mycollect.net/gudongmanage/file_browse.asp?f_id=72408)は頭部が長方形で、その両旁に圻卾（きがく）といわれる鑿歯状の切りこみがあり全体が圭の形（字統）。魯は侯であり信圭を授かり、外国に使節としてゆくときに、持参して主君の敬意を相手の主君に伝える。孔子は、定公九年から十三年までその立場にあったが、「絶えて朝聘往來の事無し」とされ、正式の使節として派遣されたことはないといふ。勝はshèngで勝つこと、shēngと読ませている。勝は説文に、「任（た）ふるなり」とあり堪える意に解する（字統）。勝（た）へざると訓じている。圭を執るときは、背をかがめて、重そうになされた。上げるときには揖するように、下げるときは授かるがごとくとは、高くともても胸より挙ぐることなく低くとも手渡す位置より下ぐることのないこと。戰は單と戈に従い、單は盾の上部に羽飾などをつけたもの、これを執って身を守り、戈（か、ほこ）を執って戦うこと、“おののく”とも訓じられる。戦慄の意は顫（せん、ふるえる）の仮借とされる（字統）。色は顔色。畏れ多くも候になりかわり敬意を伝えるものであり、勃如戰色、気をひきしめ、おののくかのごとくされた。蹜（しゅく）は宿に縮の意があり、足蹜蹜如有循（したがふ）は、こまたにつき従うような歩き方（字統）をいふ。わが国の「能」のすり足のようなものであろうか。ここでは圭を用いた敬の心を表す禮。日を改めて、享（きょう）禮が行われる。享は、献物、皮馬、錦繍、産物をさし、庭に陳列する禮。容とは宀（廟）において谷（祝禱の器に神気のあらわれるさま）が原義、有容色は顔にほのぼのとした気があらわれること。覿（てき）は、儀禮、聘禮に、「賓、束錦（そくきん）を奉じて以て覿（まみ）えんことを請う」とある（字統）ごとく儀礼用語。私覿は、非公式に覿へること。愉の兪は、針で膿血（のうけつ）などを除き、これを盤に移し取る意で、これによって病苦を除き、心のやすらぐこと（字統）。愉愉如、顔色のなごむこと。
読書会：茶道では茶杓など軽いものを重たくみせ、水差しとか重いものを軽くみせる。それが美意識とされ、ここでは、大事なものを重くみせている。

6）君子不以紺緅飾紅紫不以為褻服當暑袗絺綌必表而出之緇衣羔裘素衣麑裘黃衣狐裘褻裘長短右袂必有寢衣長一身有半狐貉之厚以居去喪無所不佩非帷裳必殺之羔裘玄冠不以弔吉月必朝服而朝

jūn zǐ bù yǐ gàn zōu shì hóng zǐ bù yǐ wéi xiè fú dāng shǔ zhěn chī xì bì biǎo ér chū zhī zī yī gāo qiú sù yī ní qiú huáng yī hú qiú xiè qiú cháng duǎn yòu mèi bì yǒu qǐn yī zhàng yì shēn yòu bàn hú hè zhī hòu yǐ jū qù sāng wú suǒ bú pèi fēi wéi cháng bì shài zhī gāo qiú xuán guān bù yǐ diào jí yuè bì cháo fú ér cháo

君子、紺緅を以て飾らず。紅紫、以て褻服と為さず。暑に當りて、袗の絺綌、必ず表して之を出ず。緇衣には羔裘、素衣には麑裘、黃衣には狐裘。褻裘、長く右の袂を短くす。必ず寢衣有りて長、一身有半。狐貉の厚き以て居る。喪を去ひては、佩びざる所無し。帷裳に非ざれば必ず之を殺す。羔裘玄冠して以て弔せず。吉月には必ず朝服して朝す。

紺緅（かんしゅう）の紺は、玄色（深青揚赤色）で齊服用、緅は浅絳色（赤茶色）で三年の喪服用。飾(かざ)る、（もとおす、もとほす｛巡らす、回す｝）と訓じるのは、衣の[領袖を縁取り](http://www.mode21.com/history/002911.html)すること。君子は、齊服喪服の色で縁取りはしない。褻（せつ）は、説文に、「私服なり」とあり、私居の服。“ハレ”に対する“ケ”と訓じることもある。正色は青赤白黒黄、それぞれの間色が緑（青＋黄）紅（赤＋白）碧（白＋青）紫（黒＋赤）緇（黄＋黒）とされる。正服には正色を用いるべしとされ、私服であってさえ、孔子は間色である紅紫を用いない。婦人、女子の服装とされたようである。紺緅の飾、紅紫の褻服が流行っていたのであろうか。

袗(しん、ひとえ)は縝単（しんたん）、葛糸で織った単衣のこと。絺綌（ちげき）の絺は布目の細かいもの、綌は粗いもの。表（ひょう）は“うわおおい”す、とも訓じられる。古人、冬には裘（きゅう、皮衣）を着、夏には葛を着る。[葛布](http://www.yoyokaku.com/sub7-28.htm)は透けて下が見えるため、當暑袗絺綌必表而出之は暑い夏に外出するときは、裏衣を着て必ずその上から袗絺綌を着たとする説と、在宅の折は袗絺綌のみであるが、外出するときには上衣をつけ、その上衣の色に葛衣を合わせたとする説がある。

冬に[裘](http://www.h3.dion.ne.jp/~china/point8.html)を着るときにも組み合わせが決まっていた。緇衣（しい）は黄黒の衣、黒木綿の上着とされる。羔裘（こうきゅう）は[烏（からす）羊](http://www.zjww.gov.cn:89/gate/big5/www.zjww.gov.cn/culture/2007-01-17/54074244.shtml)の皮衣、冬はこれを下に着込む。これは諸侯の君臣が朝するとき、祭祀の正式の服装。素衣（そい）は染色されていない生地のままの衣、麑裘（げいきゅう）は鹿の子の皮衣で色は白に近い。諸侯の君臣が月の朔日（ついたち）を告げる儀式の服装、国に凶荒あるときに君が素衣を服し、臣が従うともある。黃衣（おうい）は蜡祭（ささい）の服、蜡は歳末のこと、枯れて物黄色くなるに合わせている。大蜡（たいそ）といって、元来は豊年祭とみられているが、年末に、先祖・五祀（門、戸、中霤（ちゅうりょう。室の中央）、竈、行（道の神。これを「井」とする説もある））・諸々の神を祭るようになったとされる。狐裘（こきゅう）は、狐の皮で黄色い。褻裘は、私居の皮衣であり長いchángが、右の袂（たもと）は手が使いやすいように短くしてある。

ここからは齋を想定しているようである。齊は敬を主とす。衣を解きて寢ぬ可からず。又明衣（みょうえ、神事の服）を著て寢ぬ可からず。必ず寢衣（被る）がべつに有り、長さzhàngは一身有半、身の丈の1倍半が相場。賓客には、狐（きつね）貉（むじな）の厚手のものに座していただく。喪を去（のぞ）ひては、とは三年の喪の終わること、佩（お）びざる所無し、とは喪中に身に着けなかった冕や玉飾りなどを元通りに着けること。
[裳](http://www.h3.dion.ne.jp/~china/point8.html)は下衣。帷とは、垂れ布、幔幕のこと。殺はshā で殺すshàiで減じること、ここでは縫い合わして腰まわりの巾を狭めることか。帷裳とは正しい巾の布を垂らしたのみの裳で朝祭用。帷裳でないものは、必ず縫い合わせる。
羔裘（こうきゅう）玄冠（げんかん）は朝祭用のもの、弔（ちょう）事には用ゐない。吉月（きつげつ）とは月朔（つきはじめ）のこと。孔子は必ず、朝服（緇衣、羔裘〔冬〕、帷裳、玄冠）して朝された、ということは他の人はそうでもなかったことになる。魯においては、文公より月朔に視へなくなり、子貢はそれ故に告朔之餼羊を去（な）くそうとした。哀公のときには、他人はともあれ、月朔に哀公は欠席されたが、自らは朝服して出仕された、我愛其禮とされるが所以である。
読書会：吉月は一般的には正月、孔子が出仕しなくなっても、吉月には正装していたとみる、上記は古注。色には意味がある、禮記ではそれだけで一章をもうけており、・・・青は東、赤は南、白は西、黒は北、中央が黄色、皇帝は黄色の服を着る。百年前はこういうことは厳しく守られていた、韓国では朱子家禮で服装も決まっていた。清の時代にはこれらの文の一文字一文字を調べ、一生調べ続ける、考証学などが行われてきたが、日本の場合にはここの所は生活習慣に根づかないためとばしてしまうことが多い。

7）齊必有明衣布齊必變食居必遷坐

zhāi bì yǒu míng yī bù zhāi bì biàn shí jū bì qiān zuò

齊すに必らず明衣有り布。齊すに必ず食を變ず。居は必ず坐を遷す。

齊zhāiはここでは、神事にあづかるために、身を潔める齊浴（沐浴）。必ず沐浴す。浴しおわれば明衣を着る。身体が濡れており、それをかわかす間、肌を見せないように身に纏う浴衣。布とは布衣、麻布で作った簡単な衣、後には布衣は粗衣、あるいは身分の無い者をさすことになる。かわけば、礼服に着替える。明衣はわが国では神事の服装となる（[装束の種類](http://www.kariginu.jp/kikata/1-7.htm)）。食と居に関する齊戒、必ず食を變へる。神事にあづかるために、酒であるとか肉、刺激臭のある食物を食さない。寝門の外七日、寝中に三日とか籠もって身を潔めることがあるが、この場合には在宅での心得であろうか、居、必ず坐を遷された。改まったところに齊する場を設けられたのであろう。
読書会：One should wear a cotton bathrobe. 綿じゃなくて麻。別室居住不与妻妾同房 One should live apart from one's wife.そうじゃなくて、俗世間から離れる事、坐を遷すとは方角を変えることと関係はないか？白っぽい衣となれば西向き（白虎）か？

8）食不厭精膾不厭細食饐而餲魚餒而肉敗不食色惡不食臭惡不食失飪不食不時不食割不正不食不得其醬不食肉雖多不使勝食氣唯酒無量不及亂沽酒市脯不食不撤薑食不多食祭於公不宿肉祭肉不出三日出三日不食之矣食不語寢不言雖疏食菜羹瓜祭必齊如也

sì bú yàn jīng kuài bú yàn xì sì yì ér ài yú něi ér ròu bài bù shí sè è bù shí xiù è bù shí shī rèn bù shí bù shí bù shí gē bú zhèng bù shí bù dé qí jiàng bù shí ròu suī duō bù shǐ shēng sì qì wéi jiǔ wú liàng bù jí luàn gū jiǔ shì fǔ bù shí bú chè jiāng shí bù duō shí jì yú gōng bú sù ròu jì ròu bù chū sān rì chū sān rì bù shí zhī yǐ shí bù yǔ qǐn bù yán suī shū shí cài gēng guā jì bì zhāi rú yě

食は精を厭はず。膾は細きを厭はず。食の饐して餲せる、魚の餒れて肉の敗れたるは食らはず。色の惡しきは食らはず、臭ひの惡しきは食らはず。飪を失ふは食らはず。時ならずは食らはず。割正からざれば食らはず。其の醬を得ざれば食らはず。肉は多しと雖も、食の氣に勝たしめず。唯、酒は量無く亂に及ばず。沽酒、市脯は食らはず。薑を撤てずして食らふも多くを食らはず。公に祭して肉を宿さず。祭りの肉は三日を出でず。三日を出でたるは食らはざるなり。食らふに語らず、寢るに言はず。疏食と菜羹と瓜と雖も、祭るに必ず齊如たり。

食sì（いい）は飯のこと。食shíは食べる事。精（しら）げを厭（いと）はず。精米した米、白米、玄米より白米を好まれた。膾（なます）は牛羊や魚の肉を切り刻んだもの。細かく丁寧に切ったものを好まれた。饐（いす、すえる）yìは古語で臭気の立ち上がる語源（氤yīn）からきており、飯がむれて、ぷんぷん臭うさま、餲（あいす、すえる）àiは曷héの転音が音をあらわし、これも古語、飯が腐って臭くなること（中日大辞典、角川漢和中辞典）。饐は通常の食物が時間的経過で腐る事、餲は乾魚や乾肉などが時間的経過で味が悪くなることともされる。魚が腐ることを餒（あさ）れる、肉の爛（ただ）れることを敗（やぶ）れると称している。餒は腹がすいてぐったりしていること、敗はそこなわれて、くずれていることでもある。色惡とは常色を失っていること、臭惡とは饌（供物）に関することもされ、臭い悪くばshí食べるに宜しからず。飪(じん)は煮ること、熟すこと、失飪は生煮え、未熟の食物のこと。時（とき）ならずとは、朝夕昼の食事時のこと、あるいは、五穀実る、果実が実る時節を得ないものともされる。割（きりみ）不正とは肉を方形に、野菜を一定の長さにきちんと切り揃えないこと。醬（しょう）は肉、魚、野菜、穀物などに麹や酒を加え塩漬けにして作る、肉醬、魚醬、草醬、穀醬と種類が分かれる。不得其醬とは、食品にあわせてふさわしい醬を用いなければの義。禮記（[内則](http://www2.mmc.atomi.ac.jp/web01/Flower%20Information%20by%20Vps/Flower%20Albumn/literary%20works/China_classic/raiki_daisoku.htm#gyushu)）に詳しい。食氣sì qìは色氣の対で食欲ともされるが、ここでは肉の氣に対する食の氣。食はここでは飯であった。食氣は一字で餼（こめ）とする説もある。肉が多くあっても、ご飯の味を損ねるほど多くを食べない。主食と副食の節度を守られた。このほうが肉の味がおいしく食せる、ともされる。唯、酒については無量、ただし亂に及ばぬように注意された。沽酒（こしゅ）は売買される酒、市脯（しほ）は市販している脯（ほじし）、薄く切って塩漬けされた干肉。酒や肉を市で買うということはされなかった。祭事のお下がり、儀式や郷飲に際して召し上がられた。定公十四年（[史記世家](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/josetu.htm)）に、不致膰俎於大夫というのがあったごとく、肉などが支給されたのであろう、また、束脩（[述而篇7](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/jutsji.htm)）を授業料として贈答されるともあった。薑（はじかみ）は生姜のこと、これを撤（す）てず食すも、多くは食されない。
公に於て祭るときの賜肉は宿（しゅく）せず、とはその日の内に分けて食すこと。宿すことは、魯公室の祖霊に対して禮を失するとされたのであろう。公でない祭の肉は三日以内に食された。三日を過ぎれば食されなかった。
食すときには語られず、寢るときには言はれなかった。語は答えて述べること、言は思うことを言葉にしていうこと。食事の会話はあっても、論じることはされなかった、食することを大切にされた。臥して言いたい事をいうということもされなかった。眠るために臥したのであるから。
shū shí疏食（そし）とは麤食、玄米のこと。食shíは食べ物。菜羹（さいこう）の羹とは肉と野菜を煮たこってりしたスープであるが、菜羹は野菜だけのスープ。瓜は漬物とされる。供物が粗末であっても、祭るに必ず齊如たり。鬼神を敬して祭られた。魯論では瓜を必に作るともある。疏食菜羹と雖も瓜（かなら）ず祭る。必ず齊如たり、と訓ずる。そうではなくて、疏食、菜羹と雖も瓜祭し、必ず齊如たり、瓜祭とは、お下がりを頂く前に、少しずつを器に盛り供え、飲食（煮炊き）を始めた人に感謝する祭りとする説もある。
読書会：沽酒という表現には偽物、正しくないという意味が入っている。尊という字は酋（酒）を寸（手）で持つこと、神に捧げること、酒は元来神事で神人和合を求めるもの。酒は量りにくいのでコントロールできないから乱れるともされる。夏の三日とすれば肉はもたないが、冬は一月はもつ、三度は何度ものこと、三日は何日ものこと。三日過ぎれば鬼神が宿るからダメともある。

9）席不正不坐

xí bú zhèng bú zuò

席、正しからざれば坐さず。

説が定まらない。席そのものに関するもの、席次に関するものがある。古代には椅子も卓子もなく、地面に鋪(舖）を敷いて席とした、それが端正に（きちんと）敷かれていないと坐さず。諸侯は三重、大夫は再重といふからそれが正しく敷かれていないと坐さず。鄕黨篇14からすれば、そう釈するのが妥当である。しかし、鄕人飲酒などにおいて席次が正しくなければ、それを指摘するといふことはなく、じっと立っておられた、とでも釈せる。公式の場では、そういう訳にもゆかず、位が正しからざれば坐（お）らず、位牌の並べ方についてもこだわった先生である、大夫が下克上で諸侯の席につくということがあれば、出て行かれたのかもしれない。
読書会：何か不服がある、二度とそうしないように学習させるためにあえて自分では何もしないで立っている。自分に合わない所には行くべきでないし、加担しないほうが良いともされる。公式の場でそうされたとなれば厳しいことになる。この五文字は強烈。

10）鄕人飲酒杖者出斯出矣鄕人儺朝服而立於阼階

xiāng rén yǐn jiǔ zhàng zhě chū sī chū yǐ xiāng rén nuó cháo fú ér lì yú zuò jiē
鄕人の飲酒には杖者出ずれば斯に出ず。鄕人の儺には朝服して阼階に立つ。

鄕飲酒の禮、杖者（じょうしゃ）は老人のこと、50歳になると家で杖す、60歳になると鄕で杖す。故に老人を杖者といふ。鄕飲酒では年長者を貴ぶ。杖者が出られないのに先に出ることはなく、杖者が出られれば残ることなく出る。儺は“おにやらい”のこと。疫鬼を逐ふ、疫鬼が人に禍をなさぬよう、儺儺nuó nuóと声をあげ疫鬼をnuó（挪、捼、挼）移す。nuòは諾。周禮に、方相氏之を掌る。黄金四目蒙熊皮、戈を執り、楯を揚げ、玄衣未裳して、儺儺と唱え、疫鬼を敺(毆)ったとある。鄕人の儺には、朝服とあるから、大夫の祭服、玄冠、緇布衣、素積裳の姿で、阼階（そかい）に立たれた。阼階とは宗廟の正殿の東側の階段、主人の側とされる。方相氏にならい、宗廟に疫鬼が侵入せぬように追い払われたとなろうか？郷党の儀式においても、あるべき姿を示された。
読書会：鄕飲酒禮にあり、おにやらいには酒がつきもの、お酒で神妙な感じになる、儀式にはお酒が必要。旧正月の前の日、大晦日の花火、爆竹、と沈さん。ダダと言って鬼を払う。

11）問人於他邦再拜而送之康子饋藥拜而受之曰丘未達不敢嘗

wèn rén yú tā bāng zài bài ér sòng zhī kāng zǐ kuì yào bài ér shòu zhī yuē qiū wèi dá bù gǎn cháng

他邦に人を問はば、再拜してこれを送る。康子、藥を饋る。拜してこれを受く。曰はく、丘、未だ達ぜず。敢て嘗めず。

儀禮、聘禮に、「大問曰聘、小聘曰問」とある。大問には卿相を派遣し、小聘には大夫を使者として、隣国の君に禮物をもって訪れること、古注では、問者とは更に聘問を考えること。問人於他邦とは派遣した使者に再び禮物をもって隣国を訪ねせしめ、交流を深めること。すでに相手国の君を敬（つつ）しみてのことであり、再拜してその使者を見送られた。問人於他邦は、使者をたてて他国の友人を訪ねる、とも釈される。拜してその使者を送るのは、親しくその友人に見（あ）うが如く敬しむからといふ。

季康子が先生に藥を饋（おく）られた。食を賜えば必ず嘗めて以て拜すのが禮（鄕黨篇14）とされる。ところが、先生は拜してこれを受けられたが、その藥を嘗められなかった。その理由をこう申された。丘（私）はその藥に未だ達（つう）じていない（何の疾に効くのか判らない）ので、敢て嘗めません。孔子の疾（やまい）に応じた藥を饋（おく）ったというより、疾とは関係なく藥を饋られたのであろう。
読書会：ここまでして使者にお願いするのは、大事な事を託したから。この時期は道中の安全は確保されず、生きて帰ってくることも危ぶまれ、これで最後というような気持ちもあるのでは・・・送られた人も責任を感じて、いい加減なことはして帰ってこれない。
何故、敢えて嘗めないというのか？孔子ですらその薬の効能が分かっていない。季康子は孔子を尊敬している、大事に思っておられ、誰かからもらった貴重な薬を孔子に配られたのでは？

12）廏焚子退朝曰傷人乎不問馬

jiù fén zǐ tuì cháo yuē shāng rén hū bú wèn mǎ

廏焚けたり。子、朝を退りて曰はく、人傷ふか? 馬を問はず。

廏（うまや）焚（や）けたり。廏は馬を養うところ、馬車用の馬、孔子が司寇の時とされる。朝（ちょう）、殷代には「朝（てう）日・夕（せき）日」の禮があって、日を迎え送りし、それが政務の行はれるときとされた。朝政、朝廷の意。執務中に火事の知らせがあった、朝を退（まか）りてとは、執務の途中か、終へてか？帰宅されたときの言葉。人傷（そこな）ふか? 馬を問はず。弟子達には、印象深い言葉として残った。
読書会：これを読むと仁徳とはこういうことかと感じられる。人為的なことだが、その人を咎めず、誰か怪我をしたものがあるかを聞いた。春秋時代では馬は珍しく貴重なもの。北狄には馬が多いが南には馬は少なく、魯は小国であり、貴重なものであった。これは古典的人本主義。春秋時代は鉄器時代への移行期、封建時代には奴隷が農民となり、農民を大切にするという意識が生まれてきた。

13）君賜食必正席先嘗之君賜腥必熟而薦之君賜生必畜之侍食於君君祭先飯疾君視之東首加朝服拖紳君命召不俟駕行矣

jūn cì shí bì zhèng xí xiān cháng zhī jūn cì xīng bì shú ér jiàn zhī jūn cì shēng bì xù zhī shì shí yú jūn jūn jì xiān fàn　 jí jūn shì zhī dōng shǒu jiā cháo fú tuō shēn jūn mìng zhào bú sì jià xíng yǐ

君、食を賜はば必ず席を正し先ずこれを嘗む。君、腥を賜はば必ず熟てこれを薦む。君、生を賜はば必ずこれを畜ふ。君に侍食するに、君が祭るに、先ず飯す。疾し君これを視るに、東首し朝服を加し、紳を拖く。君命召さば、駕を俟たず行く。

君が食（しょく、調理したもの）を賜ふと必ず席を正してとは、君が居られるがごとく敬（つつ）しみて、敷物をきちんと整へること、先ず嘗（な）むとは、味見をすること、後でそれを家族、親類、縁者に分け与えたとされる。腥（せい、なまぐさき）とは、豚肉中で星のような部分とされるが、生肉一般に用いられる（字統）。これは宗廟に薦（すす）められるが、生肉のままでなく必ず熟（に）てから供へられた。生（せい、いける）は生きた家禽、家畜の場合は、これを畜（やしな）ふとは、祭祀に使うために畜ふこと。君の恵みを生かして拝するともされる。

侍食（じしょく）するとは君と食を共にすること。君祭とは、先に瓜祭とあったが、これは臣の禮、君も少しずつを器に盛り供え、飲食（煮炊き）を始めた人に感謝する祭を行ふ。臣はその時、祭らず、先に飯（はん）すことが禮とされた。中国の伝説では、燧人氏は木をこすって火をおこし、火を用いることを人間にもたらし、庖羲は、犠牲を養い庖厨（料理）して天を祀ったとされる。食事の前に祖先の遺徳を偲び、収穫に感謝する禮を表された。客としての禮では、主人が箸をつけてから飯するが、侍食や君祭においては、君が感謝の念を表はされると先に臣が飯すことが禮であったようだ。毒味との釈もある。

疾（しつ）し、とは（孔子が）病気になること。視とは見舞うこと、君が孔子を見舞うこと。東首（とうしゅ）は東枕とすること。この（陽が上る）方向に首を向けることは、生気を受けるとされた。加（か）すは着ること、朝服を身に着ける。紳（しん）は幅広の帯、拖（し）くは、引き伸ばすこと。病臥しており、著衣束帶して君を迎えることができないため、朝服を身に着けて臥し、その上に広帯を載せ、敬（つつし）みて、出仕の服装の体を整へてお迎へされた。

君命により召されれば、駕（か）は馬を車に加すこと、俟（ま）つはあてにして、期待してじっと待つこと。馬車の用意ができるのを待たず、すぐさま行かれた。大夫であれば、馬車にて行くことが禮であろう、顔淵の葬儀の際に馬車を手離すことを拒否されたことからしても、後から馬車が追ってきて乗車されたとみるべきであろう。
読書会：先飯は毒味のこと、昔は毒薬を使うことが多かった。臣下が君主を毒殺すれば暗殺。君主が臣下に毒を賜うは明殺。先飯は初めご飯だけを食して祭りが終わるとお下がりの肉や魚を食べたという説もある。

14）入大廟毎事問

rù tài miào měi shì wèn

大廟に入るに、毎事問ふ。

これも二度出てきており（[八佾篇15](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/hachiitsu.htm)）、印象深い光景であったと思はれる。
読書会：きちんと禮を伝えるため復唱して教える。聞くことで、安易に流れていくことを止めるとみる一方、毎事は毎度毎度のことではなく、分からない事を聞くというニュアンスともされる。しかし、二回もでてくるのは、普通の人とはちがった対応で目立ったものとみるべき。

15）朋友死無所歸曰於我殯朋友之饋雖車馬非祭肉不拜

péng yǒu sǐ wú suǒ guī yuē yú wǒ bìn péng yǒu zhī kuì suī jū mǎ fēi jì ròu bú bài

朋友死して歸する所無し。曰はく、我に於て殯せよ。朋友の饋りものは車馬と雖も、祭肉に非ずば拜せず。

義疏は、「（孔子の）朋友が（孔子の家で）死んだものの、近親者が居らず、引き取って葬儀をすることができなかった。そこで、私のところで殯（かもがり）をなさいと申された。」と淡々と説明する。朱熹は、「朋友は義を以て合う」、義を同じくするからこそそうされた、とその動機を加えた。饋（おく）りものの対象は、元来、貴重なる食物であろうが、ここでは車馬をもさしている。贈り物のこと。先生は、車馬を贈られて謝すと雖も拜されることはなかった。しかし、朋友の家で祖考（父、母は死して考、妣と称す）を敬して供された祭肉となれば拜された。ところで、朋友之饋とは、古来、友は財を通ずるの義、財を分かち合うべきものとの認識があり、先生がそうされたと釈される。
読書会：お供え物と車馬。車馬は経済的なもの。お供え物は気持ちのこもった物。何かあったときに助けてくれるのが朋友、朋友だったらそうしてくれて良いというのが前提。最初の方は情けがある、禮に違えば、非常に手厳しい。

16）寢不尸居不容見齊衰者雖狎必變見冕者與瞽者雖褻必以貌凶服者式之式負版者有盛饌必變色而作迅雷風烈必變

qǐn bù shī jū bù róng jiàn zī cuī zhě suī xiá bì biàn jiàn miǎn zhě yǔ gǔ zhě suī xiè bì yǐ mào xiōng fú zhě shì zhī shì fù bǎn zhě yǒu shèng zhuàn bì biàn sè ér zuò xùn léi fēng liè bì biàn

寢ぬるに尸せず、居るに容づくらず。齊衰者を見れば狎れたりと雖も必ず變ず。冕者と瞽者を見れば、褻と雖も必ず以て貌す。凶服の者はこれを式す。版を負ふ者を式す。盛饌有らば必ず色を變じて作つ。迅雷風烈には必ず變ず。

寢（い）ぬるは眠ること。尸(し、かばね)せず。死者は偃臥（古語で、仰臥）直脚せられ布をかけられる。曲禮に、「寝無伏」とあり、伏せることもないとされる。膝を屈す、横臥されたとなろうか。朱熹は、「惰慢の氣、身體に設けず。」とその心を釈した。居は家の自分の部屋に居ること。容（かたち）づくらずとは、容儀を整えぬこと、燕居、先に「燕居申申如也夭夭如也」（[述而篇4](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/jutsji.htm)）とあった。朱熹は「惰るに非ざるなり」と加え、惰慢を排することを旨としている。

先に、「雖少必作過之必趨」（[子罕篇9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.htm)）とあった。ここでは、齊衰者を見て「雖狎必變」冕者と瞽者を見て「雖褻必以貌」。狎(な)れるとは、平素より相親しいこと。褻(せつ、なれる)とは、親しくはなく目下でよく見知っていること。必變は義疏によれば、哀の心があり、必作必趨（立ちて小走りして過ぎること）といふ。貌（ぼう）すとは、元来、廟において神気すでに失われて、その形状のみが存する状態、内実は伴わないが形を整えること（字統）。ここでは、その人の位にあわせて容貌をつくられた。凶服は死人を送る衣服。式は車の橫木を摑み、頭を下げる格好。義疏は式は軾といふ。古くは立って乗車し、横木を掴んで揺れに備えた。その下にもう一本渡された横木を軾といふ。これを摑めば自然に頭が下がる。車上で敬するときに、用ゐられた。負は担ひて掲げること。版は戸籍の記された木版。後漢以前には紙がなく、版に記されていた。義疏によれば、この版は宮中において閽寺（こんじ）の管轄下にあり（閽は中門の禁を掌り守る者、寺は、入の禁令を掌る者）、国王、后、世子の宮中において、役人が之を府（保管）したとされる。朱熹は、「周禮に民數を王に獻れば、王拜して之を受く。とあり、民の數を重んずればなり。」といふ。孔子も同様に版を見れば敬せられたとなる。迅雷風烈とは義疏によれば、陰陽の気激しく天が怒れる様であり、孔子は顔容を整え之を敬し、若し疾風迅雷甚雨有れば、則ち必變、夜と雖も必ず興き、衣服し冠して坐すと釈し、朱熹もこれに従った。
読書会：上を見て寝ていると、襲われたときに一瞬では立てない。版は、版図のことでそれはいろんな土地の訴訟をするときに大切なもの。版は、戸籍であり税の元になるものとして大事にしていた。そんなものを頻繁に運ぶというのもよくわからない。

17）升車必正立執綏車中不內顧不疾言不親指

shēng chē bì zhèng lì zhí suí jū zhōng bú nèi gù bù jí yán bù qīn zhǐ

車に升るに必ず正しく立ちて綏を執る。車中にて內顧せず、疾言せず、親指せず。

車に升（のぼ）るは乗車すること。綏は車から下げられた縄、乗車の際に用い、必ず正しく立ち綏を執られた。義疏は內顧はこの場合後顧、振り返って後ろを見ることとする。馬車を操縦するには、九丈九尺（一丈：2.25ｍとして20ｍ強）前方を確認し、馬と車の接続部を注視する必要があるという。車中で孔子が突然振り返り、後ろにいる従者がそれに気をとられて姿勢を崩すのが禮に反するのはもとより、御者が気をとられて危険ということか。疾言（しつげん）とは高急、声が高く、せくようにしゃべること、親指（しんし）とは親（みずか）ら指差す事であろう。義疏は、車上の高さから車下の人を指差すと、指された人が戸惑う事になるからという。

18）色斯舉矣翔而後集曰山梁雌雉時哉時哉子路共之三嗅而作
sè sī jǔ yǐ xiáng ér hòu jí yuē shān liáng cí zhì shí zāi shí zāi zǐ lù gǒng zhī sān xiù ér zuò
色みて斯に舉らむ。翔りて而して後に集む。曰はく、山梁の雌雉、時なるかな時なるかな。子路これを共し、三たび嗅ぎて作つ。

色は気色ばむこと、色斯舉矣は鳥（ここでは雉）が人の気配を感じバタバタと飛び上がること。翔（かけ）りて而して後に集（とど）む、とは飛び上がって何処かにとまること、ここでは山梁、山の橋の上。雌雉（しち）とは雌の雉。時哉時哉、義疏は、雉が逍遥として時と所を得ている、人は乱世に遭へば、翔りて集むも所を得ず、時も失う。しかし、雉は十歩して一啄し、百歩して一飲、まことに時を得ている、と釈した。荻生徂徠は「色斯舉矣翔而後集」を詩の一節とし、これを孔子が解説しているとみるようだ。ところが子路はこれを捕まえて煮炊きして先生に供した。ところが先生は三度臭いを嗅いで食べずに立ち去られた。この釈は嗅にひきづられて、場違いな感じがあるため、説が多い。「晁氏曰く、石經嗅を戞（かつ）に作る。雉の鳴くを謂うなり、と。劉聘君曰く、嗅は當に臭に作るべし。古闃の反なり。兩翅を張るなり。爾雅に見ゆ、と。」つまり、三度鳴く、あるいは三度羽ばたいて飛び去るとなり、共も衆星共之の共、共（むか）ふ、で子路が雉に向かうと逃げたとなる。子路、これに共（むか）ふ、三嗅（みたびはばたき）て作（た）つ、と訓じられる。この方が、場面に合う。これは諸国放浪の一場面、孔子は雌雉の危険に対する対応が、乱世における人間より時宜を得たものと感じ入っていた時、子路は食にも事欠いていた一行のため捕えようとした、ところがバタバタと飛び去った。いづれにせよ、鄕黨篇の最後に何故これが置かれたものか？

了　2006.09.16